高山の文化を高めた人々

71

吟剣詩舞の興隆に尽力
唐澤龍峰（忠一）

北野龍興（興策）

60歳ごろ

唐澤忠一（雅号 龍峰）の本業は魚屋である。

昭和四十八年（一九七三）かねてから指導を受けていた義弟の大橋龍暁（暁友会会長）の勧めもあって、花川町の自宅で詩吟教室を開設した。

当時は全国的な詩吟ブームで、詩吟人口が右肩上がりに増えていた時代でもあった。

暁友会飛騨本部会長となった唐澤は、妻光枝（龍緑）との二人三脚で、吟の指導と会員の増強に努めた。温和な人柄と熱意あふれる指導、もち前の美声・吟声に魅了され、会員も徐々に増えていった。

唐澤のモットーは「和を以て貴しとなす」。みんなで仲良く楽しく詩吟をしましょうという考え方で、この方針は今も引き継がれている。

暁友会飛騨本部吟行旅行にて

唐澤はまた、漢詩や和歌を作ることにも熱心で、その才があり、多くの優れた詩歌を作り、それに吟のふしをつけて会員に教えた。それらの詩歌は「唐澤龍峰作品集」として冊子にまとめられている。

暁友会飛騨本部では、その中の飛騨にゆかりのある作品を構成吟にして、高山文化フォーラムや県民文化祭などでしばしば発表し、好評を博している。

その作品の中で、会員からいちばん評判がよいのが次の「高山の四季」である。毎年の施設訪問ほか、機会あるごとに皆で合吟しており、暁友会飛騨本部会歌と言ってよい。

—高山の四季　唐澤龍峰—

朝陽雪を染む　乗鞍の峯
山車麗々　紅橋に浮かぶ
宮川の香鱗　水流に遊び
黄杏風に舞う　城山の景

唐澤は、会の運営が軌道に乗りかけた頃「一人でも詩吟を習いたいという人が居たら新教場を開きなさい」という方針を打ち出した。

会員を募り、教場で教える立場になると、より勉強が必要で吟力が向上する、会員の増強にもなる、という考え方である。

この方針によって、新教場、新会員も増加していき、平成の初めころには、二十数教場、二百数十名の会員という飛騨で最大、県下でも有数の規模とまとまりを誇る団体となっていったのである。

唐澤の器の大きさは、こうした自分の会のことだけでなく、吟剣詩舞道界全体のことを視野に入れていたことである。とくに飛騨において、吟と舞を愛する同志は、一致団結してその興隆発展を図ることが大切との信念から、昭和五十二年（一九七七）飛騨各地の会派の会長に呼びかけ、その中心となって飛騨吟剣詩舞連合会を創設した。

この会は、流派を超え、お互いに交流・研修・親睦をはかろうとするもので、現在も毎年発表会他を催しており、そのまとまりと実績は、県下でも高い評価を得ている。

こうした吟剣詩舞道の普及発展に永年、骨身惜しまず尽力したこと、そして多くの会員および後継者も育成したことの功績が認められ、平成十四年（二〇〇二）には、高山市文化協会から文化功労章を授与されている。

日本吟道顕彰の碑（左から6番目）

また、暁友会が所属する公益（社）日本吟道学院からも吟道普及に功績があった人に贈られる元老という称号を授与され、没後、日本吟道顕彰碑にその名が刻印されている。

大正九年一月十四日　生
平成二十年三月七日　没
享年八十八歳